

『暗夜に種を播く如く——楽照雄伝——』

一楽照雄刊行会発行 432頁

瀧田 隆夫 (元協同組合経営研究所参与)



「人を褒めることは亡くなった時いうものだ」とは本人が褒められた文書を見たときの眩きである。伝記であるから褒めても今度は文句はいわない筈である。全国農協中央会を

任期途中で辞任したのは1965年、農協関係の協同組合経営研究所を辞めたのが1984年3月である。

彼が農協界で天皇といわれた理由は戦後新たに発足した農協が3～4年で左前になり農協の再建に農林中金の整備促進部長として敏腕を振るったからである。その後全国農協中央会常務理事として農協の体質改善を指導する。

彼は全国農協中央会の財政的確立を農協ビル建設に絡み行おうとしたが果たせず、先に彼が生涯反対し続けた農協合併の方針が彼の不在の理事会で決定されることもあって辞任し、協同組合経営研究所で農協のみならず協同組合全体の提言、理論活動を誰に憚ることなく展開することとなった。

研究所の理事長に就任するやその頃の新協同組合原則の普及に全力を注ぐ。ただ翻訳のみならず協同組合原則を自らの体験と哲学を基として解釈した「協同組合とは」を発行する。これは読みやすくするため奥さんに推敲して貰ったという。

(これは残念ながら12版をもって絶版)

この関連で協同組合間提携を農協生協漁協に提唱して産直の口火をきる(本人は産直の用語を否定)続いて農住都市構想を提案する。これは評者が最近知ったが1900年のイギリスの田園都市運動も協同組合運動であったことを考え合わせると共通の深い協同組合の思索が伺われる。ついで有機農業の提唱者としてその活動に邁進する。

有機農業も農住都市も同じであった。提案してしばらくすると世間が理解して持ち上げる。そうすると彼は反発する。おおむね彼が協同組合からの発想を(金儲けの否定)しているのに、協同組合であるのに株式会社を考えたり、営利を求める。農住も有機農業も金儲けの手段化するのは、彼はそれを拒否した。彼はいう「俺の考えは変わってない。しかし金儲けに利用されるなら名前を変えた方が良い」と。彼は自ら明治の頑固者と称したが、戦後の農協再建に足跡を残し、生協、農協、漁協の提携に大きな足跡を残した。その底には公私とも妥協のない彼独特の協同組合哲学があった。自ら「本は読まないけれど思索は誰にも負けない」といっていただけのことはある。

本書は一楽照雄の指導を受けた農林中金OB阿部玄氏を中心とする農協・協同組合全国連有志により企画されて生前彼とも関係深かった農山漁村文化協会が編集したものである。書名の「暗夜に種を播く如く」とは本人が論文のタイトルに使用した言葉である。これは彼の晩年の本心を言い表している。

本書の構成に移ろう。この書物は単なる伝記ではない。3部構成であるが、そのうち2部は本人の著作論文を整理し、必要に応じ註釈を加えた。

1部は総論ないし基礎理論編で協同組合の基礎である自立互助論を展開する。それは個人生活から解き起こし、自然、農業、提携、運動、協同組合、社会と展開される。その中で現代経済学の核心を批判する。いわゆる社会を決定するのは経済というドグマに対する批判である。金儲け哲学の批判といってよいであろう。これゆえに彼の提案は陽の目を見なかったものも多い。しかし彼はそれにめげなかった。だから「暗夜の種を播くが如く」となるのである。

2部は彼の就職先の産業組合中央金庫の協同組